

学んだこと経験したことすべてが最後に貴重な財産になります。

江川 大地

私は6年生薬学部の1期生として昭和薬科大学を卒業し、薬学部として初めての4年制博士課程の大学院生として、同大学の医薬分子化学研究室にて山本恵子教授のご指導のもと研究させていただきました。

私はもともと研究者に憧れて薬学部に入りましたが、学部生の高学年になり具体的な治療薬の使い方や原理を学び病院や薬局における実務実習を経験することで、臨床現場で薬剤師として働く自分の姿も想像するようになりました。さらに、進路を選択する時期になり、就職先を決定していく友人を見てみると、私が自分の興味があることに向かって進学することになぜか罪悪感を持ってしまう事もありました。また、自分が1期生であるため、相談相手となる年の近い先輩が少なかったことも悩んだ要因だと思います。この将来を決める選択は私が大学生時代に最も悩んだことでした。そんな時に、私の相談に対して研究室の先生方や家族が親身に対応してくださり、自分が本当にやりたいことに対して真っすぐ向き合うことができるようになり進学する決断をすることができました。自分の周りには支えてくれる人が多くとても幸運だったと思います。

実際に研究生活が始まるとこれまで以上に研究室にいる時間が長くなり研究が4年間の生活の中心になりましたが、その研究生活は想像と違っていました。初めは自分の興味ある実験を行い研究の幅を広げるための勉強もできたのですが、博士2年、3年と進学するうちに実験するよりも後輩の指導や実験のまとめ、学会の準備、論文の執筆などに費やす時間がとても大きくなっていきました。実験の量だけで言えば想像の半分にも満たないと思います。ただ、それは決して悪いことではなく、むしろ自分にとってとても貴重な経験になったと考えています。もちろん、たくさん実験するに越したことはないのですが、後輩の指導を行ううちに今までできなかった実験ができるようになったり、実験をまとめていくうちに研究の新しいアイデアが浮かんだり、発表や論文執筆では実験からは得られない研究者としてのスキルを身に着けることができました。私の研究生活は研究時間だけでは決して満足しなかったと思いますが、その他の様々な経験によりとても充実したものになりました。

学生の中には、私と同じように就職するか進学するか悩む人がいるかもしれません。大学院生の中には私と同じように想像と違う研究生活に戸惑っている人がいるかもしれません。自分には学年の近い先輩がいなかったのも、私がそのような相談できる先輩の立場になれたらいいなと思います。皆さんがこのメッセージを悩みを解決する言葉の一つとしてとらえていただけたら嬉しいです。